

あるアングル

落

語教室の写真は、写真屋の佐野さん（本人がこの呼称を好む）に撮つてもらつていい。ずっと前からよく知つてゐる人なので、ぼくも写真は見るのも好きなのだが、寄席の間は子どもたちの様子を見守り、出囃子をかけ、時間配分を調整し、と氣を張らねばならないため、とてもカメラを持つ余裕などない。落語教室を始めたころは、子どもたちの撮りたい表情に合うと、カメラを用意しておけばよかつたと悔いが浮かんだものだが、今はもうすっかりあきらめがついて、写真はすべて佐野さんにまかせ、彼女の都合が付かないときはあきらめる、で何の痛痒も感じなくなつた。

撮つてもらった写真は、ホームページやインスタグラムに掲載するのをはじめ、チラシを作る際にも利用する。佐野さんの写真がなかりせば、これらを作ることも、思いつくこともなかつたろうし、子ども落語も今とは違うものになつていただろう。

二年間、こどもたちの表情を追つてもらつてゐるのでもらつた写真数は万単位にのぼる。ホームページやインスタグラムに載せてゐるのは、その中のほんの一部だが、それでもかなりの数になる。こどもたちが成長するにつれてどう顔つきが変わつていくのか、ま

走に入り、いよいよ今年も押し詰まつて來た。私事だが、面倒な仕事ができた。国の基幹統計調査の一つである家計調査が当たり、十二月から半年間家計簿をつけて半月ごとに提出しなければならなくなつたのだ。一応家計簿はつけているけれど、大雑把なもの。この調査では事細かく記録せねばならず、初めのひと月は、食料品のグラム数まで書かなければならぬ。現金で支払つたものと、クレジットやプリペイドカードなどの支払いは分けて記載することになつてゐる。実は家計調査は初めてではない。まだ現職だつた頃にも当たつてゐる。当たりくじなど大概等外でくじ運はすこぶる悪いのに、こういう面倒なことは当たつてしまふ。これも現職の頃、検察審査員にも当たつて裁判所に通つたことがある。得難い経験ということでは運がいいと言えるんだろうけど……。

老い老いに
木幡智恵美

62



さて、夕焼け通信の十三年目もまた年末が訪れ、二〇〇六年に突入した。この年の10大ニュースは次の通り。

一、トリノオリンピックで荒川静香が金メダル獲得
券取引法違反容疑で逮捕
利政策を解除
七、ジャワ島でM六・七の地震が発生
地上デジタルテレビの「ワンセグ」開始
海外の物騒なことや悲惨な自然災害が混じつてゐるが、国内のニュースはめでたいものが多い。この年に誕生した秋篠宮悠仁さんはもう成人された。月日が経つのは早いものだ。日本のフィギュアスケートで金メダルを初めてもたらしたのが荒川静香。得意技イナバウワーはその年の流行語大賞になつた。十位に入つてゐる夏の高校野球決勝戦の再試合。あまり高校野球は熱心に見る方ではないけれども、マー君こと田中将大とハンカチ王子こと斎藤佑樹が対決するシーンには釘付けになつた。野球のルールをほとんど知らない義母までがマー君の名前を覚え、それ以後夫と息子が野球を見ながら話してい

ると「マー君は出ちようかね」と聞いていた。

た落語を通してどんな表情を獲得していっているのか、時を追つて見ていくとよくわかる。佐野さんが来られない寄席については、保護者に頼んで送つてもらうことがある。先日そのうちの一枚を見つてはつとした。そこに写つていたのは、高座に上がつたある子の小さな背中と、その先でその子を見つめているたくさんのお客さんの顔だつた。つまり、演じ手から見える光景なのだ。

保護者は、いくら我が子が上がつているとは言え、高座の側に立つことはまずない。ただ一つ例外がある。その子がごく幼くて高座への上がり下りや演じるのに手助けが必要な場合は、そばについてもらうことがある。たまたまそのような状態で写した一枚だつたのだ。満員でぎゅう詰めになつた客席に並ぶ顔がすべて高座に向かつており、そのどれもがとろけそうな笑みを浮かべ手を叩いてゐる。写真を見ているこちらまで同じ顔になつてくるようだ。狙つて撮つたのではなく、ただ我が子を追つて写した中にまぎれこんだ一枚だ。そしてそれは、これまでの何万枚の中に一枚もなかつたアングルだつた。なぜなかつたかを考えないわけにはいかなかつた。

この一枚のおかげで、これから佐野さんと試行錯誤することになりそうだ。

30代フリーラター 近藤大介という中国ウォッチャーワーのジャーナリストが、10月に釜山であつた米中首脳会談を「習近平が初めてトランプに勝つた会談」と動画で論評していた。

年金生活者 台頭する「帝国」である中國と、縮小する「帝国」となつたアメリカの勢いの差を言い表している。11月24日についた両首脳の電話会談は、中国側の発表によると、トランプが「アメリカは台湾問題が中国にとつて重要であることを理解している」と述べたという。これは台湾への関与をアメリカが弱めていることを表明したに等しい。

30代 中国は台湾問題を「核心中の核心」と位置づける。

年金 それが「帝国」としての発展に欠かせないからだ。「帝国」の特徴は域内に多様な勢力を抱えているところにある。中央の権力はそれらの勢力から制約を受けるので、それによつて削がれた力を補うために、域外に服属国を持ち、それらの忠誠をつかえ棒にして域内を統治する。「帝国」として

の中国にとつて、台湾はそうした附属國に相当する存在と考えられている。

トランプの発言は事実上そのことを認めることを意味する。霸權国家、すな

わち「世界帝国」だったときのアメリカにとって、西側諸国は自らの服属国であり、台湾もそのひとつと位置づけられていた。しかし、「世界帝国」の座からずり落ち、「地域帝国」へと後退しつつあ

る現在、それらの服属国を抱えきれなくなつていて。トランプの「米国第一主義」はその表明にほかならない。

30代 台湾の最大野党・国民党の主席に「超親中派」と言われる鄭麗文が選ばれた。

年金 近藤大介によると、鄭麗文は「（台湾統治の）賴清德はアジアのゼレンスキーバーになろうとしているのか？」と言つたそうだ。ウクライナがロシアを挑発して呼び寄せたように、中国に反対ばかりしていると、中国が本当に攻めてくるぞと言つてゐる、と近藤は解説している。台湾の世論が少し変化し始めていることを示してゐる

と考えることができる。

台湾民意基金会の10月の世論調査によると、20歳以上の台湾人のうち、44・3%が台湾独立を、24・6%が現状維持を、13・9%が两岸統一をそれぞれ支持している。これを去年12月の調査に比べると、独立派が7・5ポイント減少したのに対し、現状維持派は0・4ポイント、統一派は0・6ポイントそれぞれ増加している。

台湾の世論の大勢は依然として「反中的」だが、「親中的」な世論も少しずつ広がり始めていることを調査結果は示している。中国の強大化とアメリカの霸權の後退という世界史的な変化の反映をそこに見ることができ。アメリカには次第に頼れなくなつていくから、中国とは事を構えるより、友好的な関係を保つたほうがいい、という判断が広がる可能性があるということだ。

30代 中国経済が停滞から脱するには、規制の緩和をはじめとした市場原理の優先が必須のはずなのに、習近平政権は逆に統制を強めている。

年金 かつて国家が資本を統制した「重商主義」の時代に世界が回帰しつつあると習政権は認識し、それに適応する政策をどこよりも早く進めようとしていると思われる。

伊藤貫という評論家は、世界は「新重商主義」の時代に向かっていると指摘する。「重商主義」は資本主義が商業資本主義の段階にあつた16～18世紀のヨーロッパで絶対王政国家が採つた経済政策だ。国家が軍事力を使って植民地の獲得や貿易航路の開拓を進め、植民地貿易、遠隔地貿易をあと押しした。

それが形を変えて現在に回帰してきただと見ることができる。背景には先端科学技術の開発競争がある。AI、IOT、半導体、バイオテクノロジー、新素材、航空宇宙、ロボティクスといった先端科学技術は開発に膨大な費用がかかる。これまで「新自由主義」の名のもとに国家の介入を避けたがつていた資本は一転して、開発費用の負担を国家に求めるようになつた。出番

が減つていた国家はここぞとばかり開發のあと押しに乗り出した。

かつての「重商主義」の時代も、資本に対する国家の支援、介入が大きなウェートを占めた。利潤の源泉だった

が減つていた国家はここぞとばかり開発のあと押しに乗り出した。

かつての「重商主義」の時代も、資本に対する国家の支援、介入が大きなウェートを占めた。利潤の源泉だった

植民地貿易、遠隔地貿易を支えた航海術の開発や航路の開拓は現在の先端科学技術の開発に相当する。当時の歐州の主要国は航路開拓のための探検航海に資金を提供したり、航海学校を設立したり、天文学者や地理学者を支援したりして、航海術の発展をあと押しした。

国家による市場への介入、市場の統制は独裁中国のいわば「得意技」だ。当面の経済停滞は国民に犠牲を強いることでしのぎ、先端科学技術の開発に投資を集中していけば、やがて新たな一大産業インフラを世界に先駆けて築くことができる。それは新たな段階の資本主義の発展の土台になるだろう。商業資本主義時代に開発された航海術や遠洋航路が、次の段階の産業資本主義の発展の基礎になつたように。そのときこそ中国はアメリカを凌駕して霸権を手にすることができる。長期的にものごとをとらえる習慣がある中国の指導者が、そうした未来像を描いてい可能性は否定できない。